

檜原村の北秋川沿いに上流に通じる都道を辿ってみたく、また11月半ばの紅葉のとき、北秋川の河原に降りて紅葉に染まる清流に手を浸してみたいと思った。北秋川橋の上手辺りから溪流右岸に沿って河原に降りられる小道が通っているとの情報をネットで一瞥したことがある。国土地理院地図や檜原村発行の地図などを調べても、何れにも小道は記されていない。しかし探せなくとも元々との思いで小道を探してみることにした。

11月12日(土)8時過ぎに私沢の滝バス停で下車し、バス停向かい側にある「ちとせ屋」の裏、隣屋横の敷中に降りの踏み跡があったので、その辺りを隈なく探したが、河原への小道はなかった。浅間橋を渡った先のレストラウン「四季の里」の駐車場向かい側に、漸く小さなセメント階段を見つけて「これだ」と直感した。50m程降った先に分岐がある。右の小道に進み、藪を衝いて河原に降りることができた。溪流は狭からず、開き過ぎているということもなく頃合いの規模で、深さ30センチ程の穏やかな清流である。瀬音が耳朶に心地よい。下流方向の北秋川橋の手前辺りには、朝陽に照らされて朝靄が朦朧と立ち込めている。幻想的だ。夏であれば草履に履き替えて流れを遡ってみると、どんなにか爽快だろうかと思う。河原ペリの部分は紅葉に燃えているが、その上は針葉樹の緑が張り出しているので、溪流の全景が錦繡江山というわけではないが、秋色の精髓は十分に満喫できる。20分程居て小道に戻る。



穏やかに高低を繰り返す落葉道を進む。早瀬、瀬、大小の岩など溪流の諸要素が朝陽に映えて変幻する清冽を間近に眺め、チツチツと鳴く野鳥の囀りと足元の落葉の乾いた音を聞きながら、15分程進むと、突然無粋なブロッケン塀が現れる。塀を迂回する小道を上ると車道に出る。そこは村の福祉施設「やすらぎの里」である。右手の「とうげん橋」から眺める北秋川も秋色絶品である。橋を渡り、都道に出て千足に向かう。とうげん橋バス停から200m程先にある茅倉橋から右手に見える茅倉滝(落差18m)は、豪快さに欠けるが、左右から張り出した岩盤の間隙を細く流れ落ちる様には奥ゆかしさがある。橋の袂から千足集落の家並みが続く。右手の茅倉分岐を上がると、嘗て屋根材の茅を檜原城に提供したという茅倉集落がある。



千束バス停の近くに立つ、「村社御霊檜原神社」と刻まれた高さ2m程の石柱横から畑中の参道に入る。秋麗かな日和、畑では老夫妻が仲良くビニール掛けなどをして野菜づくりに勤しんでいる。参道を150m程入った先に神社はある。神社は檜原城の最後の城主平山氏重の御霊を祭っている。森閑とした境内には抱え切れない太さの神樹、老杉が植わっており、正面の社殿は小振りだが端正な品格を感じさせる。しかし悲しいかな、手水鉢は涸れ、石段は掃かれた痕跡もなく、鳥居前の掲示板には祭礼などの案内は一つとして貼られていない。氏重も今となっては忘却の人なのかとの思いが募り、寂しいものを感じた。神社前の道は、天狗滝と綾滝、つづら岩に通じている。

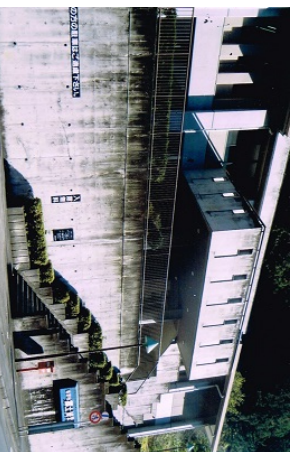
千足には檜原城の落城に絡む伝説がある。千足まで落ち延びてきた平山の将兵は履く草履にさえ事欠いた。氏重は天に向かって「履き物を」と言う千足の草鞋が降ってきた。だが、天に見放されたのか、草履は茅材だったため滑って歩けず、到頭氏重はここで自害したという。

茅倉、千足、さらに先の中里、白倉、大沢の集落を合した五集落の地域を「三都郷」と称している。その中心は神社のある千足である。千足の外れの柳沢橋の袂には昔むした聖徳太子塔、寒念仏像、庚申塔、鱗を纏ったような六臂の石仏などが無造作にひとまとめにして置かれている。

都道は柳沢橋で北向きから西へ直角に折れて中里集落に入る。中里は溪流釣りの適所なのだろうか、溪流に降りる石段が所々にある。二か所で降りて河原に出てみたが、10月以降禁漁期間なので釣り人はいない。中里橋から先は白倉集落になる。家並みは連続している。北秋川沿いは南秋川沿いに比べて無人地帯が少なく家並みが多い。

白倉バス停横に高さ2m程の石柱「大岳神社入口」がある。登拝路入口の石標である。現在も正月元旦の御来光を拝するための登拝が行われているという(蕎麦屋深山の主人の言)。東京アルコウ会のお月見山行では、大岳山コース組の下山口がこの白倉である。大岳山コース組になる機会を逃したこともあって大岳山―白倉間は未踏査である。早い時期にこの登拝路を登ってみたいと思っている。白倉バス停の標高が315m、大岳山頂が1267mでその間の距離が2.5kmである。2.5kmで比高950mを登るのは結構険しい山行になる。

白倉バス停先の八割沢に架かる暮沼橋を渡る。屋食は大沢の郷土史料館で持参のパンでも齧ろうかと思っていたが、白倉の西の端で出くわした老舗「手打ちそば深山」に釣られるように入った。蕎麦はうどん好きの自分でも美味しいと思った。店主から、高い蕎麦粉を使っているとか、食べる作法はどのようのと垂れられた講釈がなければ、もっと美味しく味わえたはずである。来客は多く、店前のテールで順番待ちしているほどだ。



白倉には、鬼の源兵衛の伝説がある。玉川上水の羽村堰工事に檜原村より9人の人夫を出せとの下知がお上よりあった。白倉の源兵衛は一人で9人分の働きをすると言い置いて出かけて、お役を見事に果たした。源兵衛は子宝に恵まれない村人が大岳神社に祈願して授かった神の子だった。大岳山の見えるところでは怪力を発揮できたという。

蕎麦屋の先、人家が暫く絶えた所にある檜原村郷土史料館に寄った。資料館は、明治に開校され昭和57年に檜原小学校に統合された後、閉校となった共勵小学校跡地に昭和63年5月に開館した。運動場はゲートボール場になっている。開館の趣旨は、村の歴史と伝統、恵まれた自然と環境の変化に改めて目を向け、ふるさと再発見の拠点となることにある由である。展示物は山村の生活を如実に表現しており、一見の価値は高い。今回は2016年11月に次ぐ二度目の訪問なので冊子資料を数点購入し、閲覧は簡単に済ませた。前回の訪問の際は、帰りのバス時刻を待ち切れず、資料館から武蔵五日市駅までのんびり歩いた。この際の歩行は途中でムカゴを拾ったり、猿と睨めっこをしたりという面白いものであった。

資料館退出時に、蕎麦屋にストックを忘れたことを思い出した。小沢、藤倉方面へ足を伸ばすことを中止、蕎麦屋に戻ってストックを回収し、弘沢の滝バス停まで歩いた。そして武蔵五日市駅までバスに乗車した。